

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23401024

研究課題名(和文) 北アメリカ北西海岸先住民諸語の自然談話にみられる複文の調査研究

研究課題名(英文) Research on the complex sentences in natural discourse in the languages of the North west Coast of North America

研究代表者

渡辺 己 (WATANABE, Honore)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：30304570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円、(間接経費) 3,360,000円

研究成果の概要(和文)：研究調査対象の言語(セイリッシュ語, ハイダ語)は、いずれもいわゆる複統合的言語であり、従属節の構造も形態論的に複雑である。いずれの言語でも、構造上は従属節と考えられるものが、文法上明確な主節がなく現われることがある。日本語で言われるいわゆる言いさしの現象と類似している文法現象である。この現象がどのような使われ方をしているかという点については、通言語的に比べてみると多くの類似が見られた。すなわち、例えば、警告や注意喚起、あるいは願望などである。その一方で、より広いコンテキストに結びつけるために主節の形式ではなく、従属節の形式を取ることがあることも分かった。

研究成果の概要(英文)：The languages that we studied in this project (Salishan and Haida) are all so-called polysynthetic languages, and the constructions of subordinate clauses are morphologically complex. What are formally subordinated clauses can appear without a clear matrix clause in natural discourse. This is comparable to the Japanese "iisashi" phenomenon. The function of such insubordinated clauses are similar a cross languages, for example, expressing warnings and wishes. They are also used to tie the clause to a broader discourse context.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：言語学 セイリッシュ語 ハイダ語 複文 従属節 北アメリカ先住民諸語

1. 研究開始当初の背景

本研究で調査研究の対象とした言語は、いずれの言語もいわゆる無文字言語であり文字資料がなく、先行研究もごく限られたものしかない。そのために、これまで本研究の代表者・分担者・協力者は、これらの言語について音声・音韻論から形態法を中心とした基礎的な記述を中心に調査研究をおこなってきた。これらの基礎的な研究が進展していく一方で、単独の節を超えた、談話単位のなかでの節のつながり方、複文の構造などの研究についてはいまだほとんど未着手のままであった。そのような大きな単位に見られる言語現象の研究には、自然談話テキストがもっとも適した資料である。しかし、これらの言語に関するテキスト資料は、公刊されているものはほとんどなく、本研究参加者がこれまでの調査のなかで収集したのもいまだに量が少なかった。本研究参加者がこのようにテキスト資料の継続的収集と複文の調査研究の必要性を感じていたところ、近年になり、複文、あるいは複数の節のつながり方について、ふたつの重要な通言語的研究が著わされた。Evans(2007)と Mithun(2008)である。ここでは、従来考えられてきたような複文構造だけではなく、形態統語的には従属節であるにも関わらず、本来あるべき主節がなく、その従属節が単独で現われる現象がさまざまな言語で見られることがとりあげられた。そのような従属節の現われ方について例が引かれている言語には、本研究で扱うハイダ語がある。さらに渡辺は同様の現象がスライアモン語にも見られることを観察し、すでに予備的な報告(AA研 2009年6月, オーストラリア国立大学 2010年3月)をおこない、さらに初期的研究発表もおこなっていた(アメリカ先住民諸語学会, 2010年1月, ボルチモア)。このような現象をも含めた複文・節の連結の形式を解明するためにはテキストの収集と分析が必須であった。さらに、本研究が調査研究の対象としている言語は、いずれもいわゆる「危機言語」であり、流暢に話せる話者はひとにぎりの高齢者に限られていた。話者との調査がまだ可能な現在、良質のテキスト資料を収集し確保することは急務であり、後世へそのような資料を残すことは研究者としての責務である。国際的にも研究者が非常に少ないこれらの言語の調査には、同地域の先住民諸語研究者ばかりでなく、それぞれの現地コミュニティからも大きな期待が寄せられていた。

2. 研究の目的

本研究では、北アメリカの北西海岸地域に分布する14語族のうち2語族に属する言語、具体的にはスライアモン語、ハルコメレム語、リルエット語(以上、セイリッシュ語族)、そしてハイダ語(孤立言語)の、現地調査による自然談話テキストの収集をおこない、得られた資料から複文に関する記述的研究を

おこなうことを目的とした。収集したテキストは、形態統語的分析をほどこし、デジタル化をし、将来的にアーカイブに入れられるように状態を整備することも目的とした。それぞれの複文についての研究のなかで、従属節が単独で現われる現象についても、厳密には複文ではないが、従属節の用法の一種として捉えた。本研究期間中に、それぞれの言語の複文とその他の節のつながり方について、網羅的な記述をおこなうことを目指した。

本研究では個々の調査研究を進めながらも、相互の研究成果を共有して結びつけ、同じ地域の他の言語については文献資料で補いながら、より広く、北アメリカ北西海岸地域についての考察を共同研究として進める。いずれの言語もいわゆる複統合的言語であり、複雑な形態統語法を持つ。そのような言語において、複文がどのような構造を見せるか、そして複文にはどのような多様性があるのかを本研究の対象言語を通して研究することを目的とした。それを踏まえて、この地域の言語の地域的特徴を捉えることと、逆に類似しているなかに見られる相違点を捉えることを目指した。

さらに、これらの個別研究と地域的類型研究を越えた、通言語的な大きな視点のなかで、これらの言語が見せる特徴を位置づける研究をも目指した。

3. 研究の方法

本研究では、特に、自然談話のなかで節と節がどのように結びつくか考察をおこなった。取り組んだ対象言語はいずれも今まで収集されたテキスト(自然談話)が少なかったため、その採録、書き起こし、話者との発音表記(書き起こし)や媒介言語への訳の確認など、基礎的な作業を地道に続けた。いずれの言語も話者数が少なく、このような資料を集めるのは緊急の課題であり、単語や単文を集める以上に労力がかかりむづかしい作業だったが、後世に資料を残すためにも重要であると考えた。特に複数の節がどのようにつながっていくか、そしてなかでも、従属節が主節なしで現われる現象は、自然談話ではなくては出てこないデータであり、狙って採れる類のデータではない。本研究では、研究協力者も含め、それぞれが対象言語の話されている地域に足を運び、話者と現地調査をおこなった。いずれの言語でも残っているわずかな話者が高齢のため、調査には時間がかかったが、研究期間を通して毎年現地調査ができ、データを得た。採録したデータはそれぞれが手書きのノートをパソコンに入力し、データのデジタル化をして、分析をおこなった。さらに、特に代表者と分担者の間で研究の進捗状態を確認し合い、得られた知見の共有をして、さらにそれを再びそれぞれの研究・分析に反映させるようにした。

具体的には、2011年度は、渡辺がスライアモン語現地調査を2011年8月(約5週間)

および2012年1月～2月(約3週間),そして研究協力者・清沢がハルコメレム語およびリレット語現地調査を8月(約4週間)おこなった。研究協力者(海外共同研究者)のマリアン・ミスンは11月と1月に,ニコラス・エバンズとは7月と11月に渡辺が実際に会って研究打ち合わせをおこなった。

2012年度は,渡辺がスライアモン語現地調査を2012年8月(約3週間)および2013年1月～2月(約3週間),そして清沢がハルコメレム語およびリレット語現地調査を8月(約4週間)および2月～3月(約3週間)おこなった。マリアン・ミスンとニコラス・エバンズとは10月に渡辺が実際に会って研究打ち合わせをおこなった。

2013年度は,渡辺がスライアモン語調査を2013年8月(約5週間),清沢がハルコメレム語およびリレット語の現地調査を,8月(約4週間)および2月～3月(約3週間)おこなった。渡辺はマリアン・ミスンと2014年1月と2月に,ニコラス・エバンズと2月に会い,研究打ち合わせおよび,成果取りまとめについて協議した。

4. 研究成果

本研究では特に自然談話に現われる複文や従属節の現われ方について取り組んだ。研究調査対象の言語は,いずれもいわゆる複統合的言語であり,従属節の構造も形態論的に複雑である。その分析を通して,その理法への理解も深まったのが大きな成果であった。具体的には,本研究開始以前は,資料が乏しく,極めて断片的にしか分かっていなかったが,いずれの言語でも,構造上は従属節と考えられるものが,文法上明確な主節がなく現われることが,確かに起こることが新たなテキスト資料の収集と分析で明らかになってきた。これは日本語で言われるいわゆる「言いさし」の現象と類似している文法現象である。この現象がどのような使われ方をしているかという点については,通言語的に比べてみると多くの類似が見られる。すなわち,例えば,警告や注意喚起,あるいは願望などである。主節の形式でももちろん同等の内容が表現できるのだが,そこをあえて従属節で表わすことによって,直接的ではなく,いわば間接的に表わすことができる。そこでは,再構築される主節が表現することを,従属節のみの形式に含意するということになる。その一方で,より広いコンテキストに結びつけるために主節の形式(の単文)ではなく,従属節の形式を取ることがあることも分かった。こちらの現象の場合は,再構築できる主節が特になく,テキスト中のその文脈で,背景的な情報を与えたり,追加的情報を与えたりする。

この言いさしに通じる文法現象の研究は,代表者渡辺己と本研究海外研究協力者のニコラス・エバンズの企画立案による国際シン

ポジウム “Dynamics of Insubordination” につながっていった(2012年10月25-28日,東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)。そこでは計18組(うち国外から14組)による発表が4日間にわたっておこなわれ,活発な研究討議がおこなわれた。この成果は論集として2014年5月現在編集中であり,エバンズと渡辺はメールでの連絡の他,何度も直接会って作業をおこなってきた。この論集はJohn Benjamins社から出版の予定である。

消滅の危機に瀕している研究対象言語それぞれについて,現地調査を継続しておこない,質の高い一次データを採録できたことは,長期的に考えて,本研究を超えた大きな成果であったと言える。採録したテキストやその他のデータは,アーカイブ化を予定しているが,分析や整備が期間内には終わらなかったため,今後アーカイブに入れることができるように整備を続行する。作業をおこなっているなかで,この類のデータをアーカイブに入れる際のさまざまな問題点があったことも本研究の副次的な成果である。具体的には,まずそのようなアーカイブ自体が数少なく,データの受け付け方もまちまちである。そのなかでは,ロンドン大学のアーカイブについて,関係者と協議をして具体的な情報を得ることができた。データをアーカイブに入れるにあたっては,データを提供した話者(あるいはその遺族)の許諾が必要である。許諾を得る際に,ロンドン大学のアーカイブでは,データをどの範囲に公開するかをデータ提供者が決めることができる。これによって繊細な権利関係を犯すことなくアーカイブに入れることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

堀博文 2013. 「危機言語にみる変異と変化
ハイダ語(北米先住民諸語)の場合」,『明海日本語』第18号増刊号(明海大学日本語学会) pp. 75-97. 査読なし

堀博文 2012. 「ハイダ語の使役について」
『北方言語研究』第2号. pp. 91-114. 査読有

渡辺己. 2012. 「スライアモン・セイリッシュ語の品詞分類について」影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望3 語彙と品詞』くろしお出版 pp. 99-121. 査読なし

〔学会発表〕(計 6 件)

渡辺己. 2014. "The Polysynthetic Nature of Salish," International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages. National Institute for Japanese Language and Linguistics. 2014年2月20日

堀博文. 2014. "Polysynthesis" in Haida. International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages. National Institute for Japanese Language and Linguistics. 2014年2月20日

渡辺己. 2014. "Historical origins of the applicative suffixes in Sliammon Salish," 2014 Meetings of the Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas (SSILA), Minneapolis, U.S.A. 2014年1月3日

堀博文. 2012. "Polysynthesis in Haida" International Workshop "Linguistic Documentation and Description of the North." 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2012年12月1日

渡辺己. 2012, "Dependency and Insubordination in Sliammon Salish." Symposium: "Dynamics of Insubordination," Oct. 25-28, 2012. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2012年10月26日

渡辺己. 2012 "Reduction from bi-clausal to mono-clausal constructions in Sliammon Salish", 2012 Meeting of the Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas (SSILA) Portland, U.S.A. 2012年1月6日

渡辺己. 2011. "Valency Classes in Sliammon Salish," Conference on Valency Classes in the World's Languages, April 14-17th, 2011 (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig. 2011年4月16日

〔図書〕(計 2 件)

渡辺己. 2014. "Notes on the Sliammon Language." Elsie Paul, Written As I Remember It, in collaboration with Paige Raibmon and Harmony Johnson. Vancouver: University of British Columbia Press. 468 pages.

渡辺己. 掲載確定 "Valency Classes in

Sliammon Salish." in Bernard Comrie and Andrej Malchukov (eds.), *Valency Classes: A comparative handbook*. Mouton. 総ページ数未確定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 己 (WATANABE, Honoré)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：30304570

(2) 研究分担者

堀 博文 (HORI, Hirofumi)
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：10283326